マオイストに関する管見

2008 年 4 月 24 日

首藤信彦（すとうのぶひこ）

１．マオイストに関する伝聞

王政ネパールの政治情勢をここまで変化させてきた最大の政治主体が共産党毛沢東派（以下マオイスト）にあることは明らかだろう。これまで報道されてきたのは、主としてマオイストの軍事的側面で、王政と対峙し、また他の政党に対する攻撃や住民に対する暴力と脅迫が、マオイストをして現代民主主義思想からかけ離れた時代錯誤の左翼過激思想の信奉者やテログループと国際社会に位置づけるにいたった。その名称となっている毛沢東主義にしても農村ゲリラ、持久戦論や文化大革命まで、毛沢東思想のどの部分を掲げてその行動原理としているのかも不明遼であり、毛沢東思想の本家である中国からも共感や支援は得られにくかった。信奉する思想家の本家から支援されない以上、これまでの多くの左翼武装勢力とは異なり、その武器･資源（人・物・金・情報）をどこの外国勢力から支援を受けているか不明であるというより、外部からどれだけの支援を受けているかも疑問である。一説によると、スリランカの LTTE（タミル解放戦線）から武器の支援を得ているというが、確かではない。現地の多くの専門家はむしろ、マオイストは外国からの支援ではなく、むしろ自分たちのテリトリーの中で、通行料や庇護料、組織への寄付や協賛金などを半ば強制的に徴収したり､さまざまなホテルなどビジネス組織に政治献金を課して、組織を運営しているという。

このような軍事政治組織はこれまでのゲリラ組織にもあったが、彼らが、外国からの指令などでなく独自路線であるがゆえに、武装闘争をやめてジャングルから姿を現し、直ちに公然組織＝政党として政権に参加するということは常識的には容易ではない。しかしながら現実には、ネパールのマオイストは保守系を含む他党と連帯して（７党合意）連立政権を樹立、その一翼を担って王政を追い詰めるような高度な政治的自己抑制力を示し、政府参加にしても情報相のような弱小政党としては決定的に有利なポストを獲得、また今回選挙においても平和協定を守って配下の人民軍の行動を凍結し、逆に、多くの若者･女性を動員して選挙戦を有利に戦い圧倒的に勝利した。こうしたある意味での左翼ゲリラのサクセスストーリーは他に類を見ないものであるといえよう。

２．マオイストの綱領、マニフェスト

残念ながら、マオイストに関しては表面的な報道があるのみで、その綱領や思想についての分析は寡聞にして要領を得ないが、マオイストは HP などに独自の政策パッケージであるマニフェストを登場させているという（ネパール語のため実態不明）。英文の HP を見る限りではむしろ伝統的なマルクス思想やケバケバシイ鎌とハンマーのシンボルという旧いイメージであるが、ベルリンの壁崩壊前後を知らない若者には、意外とナウく感じるのかも知れない。彼らの政策なり戦略なりを理解するうえで一つのヒントは、マオイストの毛沢東思想というものは、日本軍あるいは蒋介石軍と戦って人民中国を建国した毛沢東の中国共産党の指導者としての実像よりも、政府軍や外国の侵略勢力との戦いと同時に封建制度や因習などの撤廃に取り組み、公正な社会を創りだそうとした理想の指導者のイメー

ジに基づいているのではないかと思う。

また西側の研究者からは、ネパールのマオイストが共産中国の毛沢東というより、ペルーのセンデロルミノソ、ニカラグアのサンディニスタ政権、そして最近ではヴェネゼラのチャベス大統領のようなラテンアメリカの左翼･社会主義との類似が指摘されているが､ネパールの置かれている状況を考慮するとその指摘が的を得ているように思える。

そのように考えると、ネパールのマオイストは、毛沢東思想に学ぶというより、現代の技術革新・社会変容、市場化・グローバル化などにさらされている後発アジア発展途上国の近代化を目指す現代的な政治勢力であると解することも可能である。

ラテンアメリカのマオイスト思想にはマルクス主義的な西欧社会主義思想の現実社会への適用矛盾に苦しんで､地域の民族特性･文化伝統や歴史的展開を前提とする社会主義思想の新構築に努力する思想家や学者が登場するのだが、ネパールのマオイストにおいて、そのような役割は党首 Prachanda（プラチャンダ)氏に次ぐ No. 2 といわれる Dr.　Baburam Bhattarai（バッタライ）氏が担っていると推測される。

（左が Bhattarai 副党首、右が Prachanda 党首　2008 年 4 月 12 日カトマンズ）

UPF(United　People's　Front: 人民統一戦線)の指導者であったバッタライ氏は 1996 年 2 月に"People'sWar"　人民戦争すなわち、立憲君主制、ネパールの社会に残存する封建主義、帝国主義、エリート主義そして官僚支配的資本主義への「武装闘争」を呼びかけた。このことは造反有利とか大衆の人民戦争への参加など、農村革命家を真骨頂とする毛沢東の主張に影響を受けたものであると判断される。

同時に、バッタライ氏はネパールを代表する知性と言われ、彼個人への信頼がマオイストへの信頼にも繋がっている面も指摘されている。ネパールの貧困や社会矛盾を解決する

ためにも、経済を含む社会システムを現代化しなければならないという主張は、むしろ経済改革派にも受け入れられやすい。しかし、残念ながらマオイストはジャングルの帳の中から急にその姿を現したばかりで、彼らの思想、理論、綱領などの部分の分析はまだまったく進んでいないので、軽々に判断することはできないだろう。

マオイストの動向がさらに注目されているのは、マデシ民族グループのの自己主張とタライ地方の分離独立の動きとの連動の可能性である。マデシはタライの主要民族エスニシティであるが歴史的に社会システムにおいて差別されてきた。しかし、一方では経済成長を続けるインドに接し、その民族的な自覚が高まってきているのは否定できない。王政でなく、一人一票の民主選挙を行えば、かならずマデシあるいはタライ地方の影響力が強くなることは当然の帰結である。マオイストがこのような動きにどのように絡んでいくのかが今後の一つの焦点となろう。

マオイストは市場主義やビジネスの発展に否定的でなくて、そのことが若い世代の共感を生んでいるのだろうが、西側の批判者からすると単に自分たちを穏健な改革派に見せるレトリックにすぎないということになるのだろうが、冷戦構造崩壊後も中国共産党など市場化路線によって生き残った共産党をみても、意外とこの点には矛盾と同時に共存の合理性があるのかもしれない。

マオイスト躍進の最大の功労者ともいうべきものは、女性票であろう。今回の選挙では男性が国内外に出稼ぎに行って不在である分、女性票のウエイトが高く、またマオイストの掲げる伝統や因習からの脱却が、農村地帯の女性票獲得にも大きな役割を演じていると想像される。自分はマオイスト支持者ではないという女性も、マオイストの掲げる女性を伝統社会の因習や拘束から解放する政策たとえば、“cow　shed”（生理期の女性を不浄なものとして牛小屋に閉じ込めるなど）の廃止などは好意感を持って受け入れられているように思える。

３．現実にカトマンズであったマオイストとシンパそして YCL の存在

残念ながら小生の監視活動がカトマンズとその周辺に限られていたため、農村部あるいは武力衝突の多い地域でのマオイストの実像や住民の感情を知ることができなかったが、都市部においてはマオイストの橋頭堡といわれる第 10 選挙区だけでなく、市内での広範な支持が見られた。驚かされるのは、本来許されるはずのない政党ゲートが残存したことである。市内において、マオイストの党のシンボルである鎚と釜（かってのソヴィエトのもの）の書かれたポスターやワッペン類はマオイストの優勢地域以外には見られなかったが、写真のようなプラチャンダ党首をネパールの初代大統領に！という政党ゲートは各所に見られた。なぜこのようなのが選挙管理委員会に黙認されているのか、複数の関係者に聞いたが結局わからなかった。単なる憶測だが、連合政府において、マオイストは情報相のポストを獲得しているので、政党の宣伝には何らかの効果があるのではないか... との声があった。

（カトマンズ市内の政党ゲート、政党ロゴ、シンボル、党首写真など掲載、選挙当日も同じ）

カトマンズに入るまでは、マオイストというのは非公然組織武装闘争組織であり、思想信条に共感はしても、マオイストへの支持を表立って表明する人は少ないのではないかと考えていたが、現実にはとおりがかりの普通の市民が「自分はマオイストだ」とか「自分はマオイストを支持している」と公然というのを見てマオイストというのが、西側の解釈と異なり、ネパールの人々には正規の政党、むしろトレンディな人気政党と位置づけられていることがわかった。

選挙日に投票所（polling　center）の前に各政党がブースをかまえ、デスクの上で選挙人名簿のチェックをしている。これ自体、一般的には禁止されている投票勧誘であり、ネパール選挙の不思議なシステムだが、スタッフによれば、党の支持者が公式の選挙人名簿からもれているかどうかチェックしているという。ということは、各政党のデスクに来る選挙人の数で、事実上の出口調査（入り口調査？）が行われることになるが、カトマンズ市内ではマオイストのブースが圧倒的に多く、大体マオイスト２、統一共産党（UML）１、国民会議派１、諸派１ぐらいの確率で、従って小さい投票所にはマオイストのブースしかなかった。（これは後の選挙結果と符合していた！）

またそこで名簿のチェックや選挙人のさまざまな相談に応じているスタッフが、マオイストの場合は圧倒的に油の乗った若手ビジネスマンという感じの 30 台の若者で、しゃれたサングラス、ファッショナブルな服装、指輪などの装飾品という感じで、まさに社会の中核を担う若い世代という雰囲気に満ちていた（首藤報告写真参照）。逆に諸派などでは日本と同じで女性グループさらに国民会議派では高齢者あるいは若いのだがアルバイトで来ているのではないと思われる雰囲気がただよっていた。唯一の例外はとある郊外の投票所

で、ここは伝統的衣装に身を包んだ女性が「女性の家」のようなところにたむろし、そこから女性だけが集団で投票していたが、明らかに村長と見られる人物が列を取り仕切り、また投票所外の政党ブースでは、政党スタッフが所属政党を名乗らず、自分は無所属だと主張していた。このように、村をある政党が支配しているような例を除き、どこでもマオイストは圧倒的な支持を顕示していた。

マオイストが国連の求めおよび平和交渉によってその武装活動を停止し、人民軍が兵営にこもるようになって、表面に浮き上がってきたのがYCL(Young Communist League)の存在である。日本でも学生運動盛んな時期にこのような共産党の分派が多数存在し過激な活動を行ったが、YCL は活動の縮小した人民軍に代わって、道路閉鎖や寄付の強制、他党候補への脅迫などで前面に登場してきた。マオイストそしてプラチャンダ党首への各党からの YCL 活動自粛要請を受けて、マオイストは何度も YCL の活動停止を言明したが、現実には選挙日にいたるまで、さまざまな衝突が見られた。YCL カトマンズ市内の投票所では前述の投票所前のブースではなく、投票所への道の周辺に本部からのワッペンや紅いツバのキャップなどをかぶったジーンズの若者がたむろし、一種の無言の圧力と影響力を示していた。また、万一の時には何らかの行動を起こすのではないかと危惧された。YCL の上部はマオイスト青年部といった感じで、統制がとれ、それなりにしっかりとした政治的主張があったが、あきらかにティーンエイジャーと目される少年少女の集団もいて、30 台前半のリーダーの周囲に集まっていた。中には写真のように、刺青をしてタバコを吸っている少女や、アルコールの臭いがする少年などいわゆる不良少年というカテゴリーを彷彿させるものも散見された。

（カトマンズのマオイスト、中央椅子が 34 才のリーダー）

マオイストはYCLの直接の管理はないと主張しているが､それを信じるものは少ない。ある意味で人民軍の代替集団として活動した彼らに対する管理が行き届かず、暴走する可能性もあったことは否定できないだろ。今後、連立政権樹立そして既成政治勢力との交渉･妥協において、YCLがどのような行動をとり、またどのような役割を担うかは不透明である。

マオイストにとっては諸刃の剣の意味合いを持つ YCL であるが、一つ確かなことは、マオイストが政権として確立するかどうかは、今後のネパールの政治状況そしてアメリカやインドなどの影響によって左右されるのだろうが、この選挙によって呼び覚まされた若者と女性の政治参加、そしてこのとき生まれた 30 歳代の政治リーダーの集団が今後のネパールの政治を大きく動かしていくことは間違いがなかろう。　＜了＞